

ベル・クラネルの日記 帳

重言 白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕は知っている。

おじいちゃん^{クッヅヅジイ}が本当は人間じゃなくて、ゼウスという神であるという事を。

僕は知っている。

僕は捨て子やゼウス・ファミアの子ではなくて、おじいちゃん^{クッヅヅジイ}の指示で焼き払われ、今や痕跡すら残っていない村に生まれた子供だという事を。

僕は知っている。

おじいちゃん^{クッヅヅジイ}はヘルメスという神と共謀し、僕をオラリオで英雄として担ぎ上げようとしているという事を。

僕は知っている。

おじいちゃんには他にも協力者……協力神？

がおり、少なくともこの村の住人はお

じいちゃんのシンパであるという事を。

僕は知っている。

モンスターの中には、自分から率先して人間を襲うものばかりでは無いという事を。

僕は知っている。

ハーレムを作れと言いながら、困った女性の面倒を見れないおじいちゃんは、いい加

減刺されるべきだという事を。

僕は知っている。

そんなおじいちゃんを追いかけ回す、苛烈な女性の本性を。

なのでおじいちゃんがモンスターと戦っている時に崖から落ちて死んだと言われた

時は、特に何も感じなかった。

精々、これから迷宮都市オラリオに行くのかと思っただくらいだ。

そもそも生きてるだろうし。

目次

ベル・クラネルの日記：1	1
デルメルファミアの業務日誌	
7	
ベル・クラネルの日記：2	13
ベル・クラネルの日記：3	20
××のベル・クラネル観察日記：1	
26×	
ベル・クラネルの日記：4	32
ベル・クラネルの日記：5	39
ベル・クラネルの日記：6	45
ベル・クラネルの日記：7	51

ベル・クラネルの日記：8	57
戦闘娼婦のレポート	65
ベル・クラネルの日記：⑨	71
Nルート	
ベル・クラネルの日記：10	78

ベル・クラネルの日記：1

?月?日

あの村を出発してから1週間、ようやく迷宮都市オラリオに着いた。

馬車の御者さんが日記帳をくれたので、今日から日記を書くことにした。

とりあえず冒険者になる気は無いので、アルバイトの求人を探した。

おじいちゃんクッが女性JJに対して借金してまでつき込んでいたせいで、家やら何やら全財産を売り払って残ったのはたった10000ヴァリス。

まともな仕事に就職して稼ごうにも、先立つお金がなければならぬというこの世の理不尽。

今日は幸運にもデメテルファミリアというオラリオ随一の生産系ファミリアの収穫の手伝いという求人を見つけることが出来たので、応募だけしてきた。

今あるお金は全て食費に費やすと決め、本日は野宿だ。

今日の晩御飯は無し。

……星がよく見えるなあ。

?月?日

今日からしばらく、デメテルファミリアにお世話になることになった。

賃金は他の仕事に比べると安いけど、三食に加えて屋根と水を借りられるという好条件。

そもそもこのアルバイト自体、僕のような都市の外から来た人や孤児などの日々の生活に困窮している人を対象にしているのだから。

デメテルファミリアの方から、冒険者になる気がないなら、早めに転職先を探した方が良いというアドバイスもいただいた。

農作業はとても重労働で大変だったけれど、なんとか生きているという実感が得られる素晴らしい体験だった。

ファミリアじゃなければ、農家として永久就職していたかもしれない。今日の晩御飯は歓迎会という事で、豊饒の女主人というお店に行った。

綺麗な女性達がウエイトレスをしていたが、綺麗と思うだけだった。

なんというか……普通は美味しそうな食事を見ると食べたいと感じるのに、美味しそうと思うだけで完結してしまうような違和感を感じた。

見るだけで強いとわかる人ばかりだったからかもしれない。

……シルさん以外は。

?月?日

最近、街に出るたび冒険者に絡まれるようになった。

僕が普段から持ち歩いているお金なんて、ダンジョンに潜れば直ぐに貯まる程度なのにね。

今はデメテルファミリアの仮宿から出ないという対策でどうにかしているが、そろそろ雇用期間が終わるのでどうにかしなければ。

それとは別の話だけれど、よく誰かの視線を感じる気がする。

視線は摩天楼の方向からが1つ、物陰や屋根の上などからが2つだと思う。

流石に部屋の中まで付いてくることはないけど、どちらも視線を辿っても誰もいないので、もしかしたら居るかもしれないという恐怖が常にある。

今日の晩御飯はパンと野菜とくず肉のスープだった。

労働の後のご飯は美味しかったです。

?月?日

もうすぐデメテルファミリアでの雇用期間が終わるのだが、転職先が見つからない。外に出ると冒険者に絡まれるせいでなかなか行動できないというのもあるが、何故か

殆ど門前払いされたからだ。

門前払いされなかったお店も、名前を伝えたら追い出された。

そこまで問題行動をした覚えもないので、おそらく僕を普通のお店に就職させないようになっている誰かが居るのだろう。

……ヘルメスファミリアとギルドだろうなあ。多分。

おじいちゃんジイの協力神筆頭だし、能力的にも他の仕事に圧力を与える事が出来るのはそれくらいだろう。

ヘファイストスファミリアも可能性としてはあるけど、彼女には動機がない。

主神の指示とか天界での貸しなんて可能性を考慮しても、自らの悪評を覚悟してまですることでもないし、それとなく実行するには適性がないと思う。

なのでこの件はヘルメスとウラヌスのどちらか、あるいは両方が起こしたものと仮定する。

もちろん僕自身に問題がある可能性もあるので、先輩にも明日確認してみよう。

今日の晩御飯は極東のコメとミソスープ、ヤキトリ。
フォークとナイフを兼ねるハシはとても便利。

?月?日

幸運にも宿付きのアルバイトを見つけてくれた！

デメテルファミリアの先輩に事情を話すと、安全かつまともに面接してもらえという職場を紹介してもらえた。

そのお店の名前は豊饒の女主人、歓迎会で来た綺麗な女性のウエイトレスが沢山居る酒場だ。

僕は男ですよ!? と先輩に言ったところ、女顔の童顔だから大丈夫と言われた。いやいや、無理でしょ……というダメ元の心境だったのだが、まさかの合格。

1番の理由が、ウエイトレスの格好をしても違和感がないからというのが……就職できただから喜ぶべきなんだけど、若干悲しい。

僕は！ そんなに！ 男らしくないのか!?

といつても、僕は基本裏方で仕込み作業やミアさんの調理補助などの雑用を担当することになるらしい。

ウエイトレスとしてホールで働けと言われなくて、本当に良かったと心の底から思う。

それと今日は就職先が決まったのもあり、少し奮発して魔石灯と燃料の魔石、ポーションを買ってみた。

魔石の中に含まれる燃料とは一体なんなのか、ポーションで傷が治るのは一体どうい

う理屈なのか。

正直にいうと魔剣や魔道書も欲しいが、あまりにも高すぎて手が出せなかった。

魔剣には精神力が込められているから魔法が発動するのか、発動する魔法はどのよう
に決められるのか。

魔道書は強制的に魔法を発現させるが、その時人体にはどんな影響が出ているのか。

僕の目的の1つを達成するためにそういった事を知りたいのだが、設備も人員も資金
も、何もかもが足りないのが現状だ。

ところでエルフの森には魔法を学ぶ学校があるというが、神の恩恵を受けなければ魔
法を使えないのに、何を学ぶのだろうか？

仮に恩恵を受けずとも精神力を知覚する術があるなら、是非とも知りたい。

その学校に通っていた知り合いが欲しいと思うが、エルフは基本的に他種族を見下す
傾向があるので、無理だと思われるので、いつかエルフの森に侵入してみるしかないか
もしれない。

今日の晩御飯は山盛りのナポリタン。

もうすぐデメテルファミリアでの食事も食い納めと思うと、普段より良く味わって食
べようという気持ちになる。

デルメルファミリアの業務日誌

?月?日

今年も大量の孤児や浮浪者に食事と宿を貸しつつ、上手いこと働かせる季節が始まった。

私の担当は都市の外から来て浮浪者になりかけていた白髪の少年1人、ダイダロス通りの孤児の少年少女4人の計5名。

初日は雇用期間中の業務内容と作業の流れを説明し、全員を風呂に入れ、結束を固めるために豊饒の女主人で宴会を行った。

団結……したかどうかはともかく、私の指示を聞くようにはなったのでよしとする。

?月?日

今年のアルバイト達は、例年よりも良く働いてくれている。

白髪の少年……ベル・クラネルがダイダロス通りの少年少女に指示を出している姿をよく見る。

あそこの子達はあまり他人を信用しないのにも関わらず、しっかりと指示に従ってい

るのは、それが正しいと理解しているからなのだろう。

事実、私はその指示は間違っていると指摘しようとした時、私より先に反論していた。
あれ？ 私、必要ない？

？月？日

休日以外に出たクラネル少年が冒険者に襲われた。

何とか無事だったが、また同じような事があれば私が護衛しようと思う。

ただ、うちのファミリアでこの時期、治安向上を目的として貧困層に仕事を与えているのは周知の事実。

わざわざ彼を襲う理由がわからない。

物盗りらしき言動を繰り返していたらしいので、ソーマファミリアみたいなノルマがあるファミリアの冒険者に、金を握らせて襲わせた？

一体何のために？

とりあえずこの件はギルドに報告しておく事にする。

？月？日

クラネル少年を襲撃した冒険者達が、クラネル少年の手により血祭りにあげられた。

ちやうど私が用事があつて護衛できなかつたタイミングで、事件は起きた。

クラネル少年は新しい職場を探すため、様々なお店を回っていた。

この時何故か、殆どのお店で門前払いを受けたらしい。

理由は田舎者だの肥溜め臭いだの農家風情だの……とりあえず該当店舗は今後、デメルファミリア及び提携農家から食材を買う事はできないと思え。

農家を馬鹿にする奴に食わず食材なんてウチにはない。

クラネル少年はどのお店でどういった対応を受けたか、しっかりと報告してくれたかな？

後日しっかりとリストにして提出する事にする。

それはそうと、今は事件の詳細を書く。

またも門前払いを受けたクラネル少年は、気晴らしとしてじゃが丸くんの屋台に行つた。

じゃが丸くんあずきクリーム味を購入し、近くに座つて食べていた時、いきなり後ろから剣で殴打されそうになったのだとか。

剣を躲された冒険者は激高、冒険者はモンスターを倒しているから市民より偉いという謎の理屈を語りながら、近くいた女性市民を人質にとり、人質の頬を舐めるといふ変態行為をしながら財布と奉仕を要求。

何故市民が人質になると判断したのか、理解に苦しむ。

クラネル少年は指示に従って財布を取り出し、投げて渡せと言われたので冒険者の顔に叩きつけるように投げた。

冒険者の顔に財布が当たり、痛がつている間に市民を救出。問題はその後。

目撃者によると、残った冒険者を素手で壊し始めたらしい。

この冒険者はレベル1ではあったが、それなりのベテランで偉業さえ達成すればレベルアップ。確実と言われるほどだった。

ここからがクラネル少年本人の証言だ。

先ず抵抗力を奪うため、指を踏み砕いた。

次に行動力を奪うため、膝を逆に折り曲げた。

最後に心を完全にへし折るため、全身の骨を順番に砕いていこうとしたとき、他の冒険者達が襲ってきた。

性犯罪者の同類であると判断し、同じように対処した。

とのこと。

この事件は最後、人質にされた市民が近くにいたガネーシャファミアの冒険者を連れてきたことで終了した。

性犯罪者は命に別状がない程度に全身の骨を砕かれた状態だったらしい。

今回の件で正式に私がクラネル少年の護衛につく事になった。

?月?日

雇用期間の終わりが近づいてきたが、クラネル少年のみ次の就職先が見つからない。
い。

デメルファミリアに永久就職しないかと誘ってみたが、断られた。
未だに妨害らしきものは続いているらしく、殆どは門前払いらしい。

……そうだ。豊饒の女主人なら、妨害は受けないんじゃないか？

こう言ってはなんだが、ギルドのブラックリストに載ってもおかしくないような面子ばかりだし、良いかもしれない。

というわけで推薦してきた。

今度面接に来なという返事をその場で頂けた。

この事をクラネル少年に話すと、嬉しさ半分困惑半分みたいな微妙な表情をされた。

ああ！ 童顔だから大丈夫と思ってたけど、そういう風に思われるのは男の子としては嫌なものか。

この業務日誌を書いている時によく気付いた。

まあ……いつか。大丈夫でしょ、多分。

?月?日

今日は雇用期間の最終日。

サクサク進んでいた私の班は既に業務を前日までに終え、既に引越しの支度を始めていた。

業務時間中以外に問題が多発したけど……というか大体クラネル少年が台風の目だったけれど。

結局豊饒の女主人に就職できたみたいだし、他の少年少女達も就職できた。

そのうち2人はデメテルファミリアへの就職を決めたので、他の子の手伝いをしていく。

明日恩恵を授かることで、正式にファミリアの一員として認められる。

……この2人は幼馴染で、将来結婚しようと約束しているのを目撃した。

私もそろそろ、相手を探さなきゃいけないかもなあ……

ベル・クラネルの日記：2

?月?日

今日から豊饒の女主人で働き始めた。

あの村にいた時に、おじいちゃん、ハールムの女性が料理を教えてくださいましたので、手際が良いと褒めてもらえた。

それとウエイトレスの格好をしなきゃいけないのかなと思っていたが、実際にはウエイターの格好をさせてもらえた。

若干男装の麗人っぽいデザインなのが気になるけど、スカートよりかはずっと良い。クロエさんからお尻を触って良いかと聞かれたが、アレはどういう事だったんだろうか？

聞き返すよりも前にシルさんとリユーさんに、ミアさんの前に連行されていったので真意がよくわからない。

僕に性的に興奮したということは先ず無いだろうし、もしかしたら服装か姿勢か、勤務態度に変なところがあったのかもしれない。

その指摘をお客様には聞かれないようにするための、何らかの隠語だった可能性もあ

る。

でもそうだとしたら、どうして怒ったミアさんの前に連行されたんだろうか？
やっぱり明日クロエさんに聞いてみよう。

今日の晩御飯は売れ残った料理を使った炒飯。

僕にはまだ、このパラパラ感を再現できそうにない。

?月?日

今日は色々あつて疲れた。寝る。

今日の晩御飯は極東から伝わりしテン||ド||ン。

具材に衣を付けて揚げただけのテン||プラ||が、まさかあんなにも美味しいだなんて

……

?月?日

昨日は初めての休日だった。

だからといって急いでやるべきこともないので、久しぶりにブラブラと目的のない散歩をしていた。

そんな時、路地裏で倒れている少女を見かけた。

発覚しそうな雰囲気がある気がする。

それと駄女神キングボンビーをヘアファイトスファミアに擦りつけた後、せっかくの機会なのでテナント内を見てまわっていると、椿・コルブランドという女性と出会った。

ちようどその時、彼女が作った特殊武装を見ていたのがきっかけだった。

使えば壊れる魔剣と、手入れが必要だけど使い続けても壊れることはない特殊武装の差とは何か……そんなことを呟きながら不壊属性を付与された特殊武装を観察しているとき、かけられた魔法の最大出力の差ではないか？ という見解で背後から話しかけてきたのが彼女だった。

3時間ほど魔剣と特殊武装について語り合った結果、得難い友人になったと思う。

作品を軽く振らせて貰った感じ、見た目の斬れ味より明らかに斬れ味が悪かった。

斬れ味を落とすというデメリットを代償に、壊れないというメリットを永続化させているのかもしれない。

しかしそうだとすると、ハンマーのような打撃武器ならデメリットが実質存在しないという事になる。

しかし僕の知る限り、打撃武器をメインで使う有名な冒険者は居ない。

打撃武器には付与できないというわけではないが……

ヘアファイトスファミアに勧誘されたが、そこは拒否してお店に戻った。

翌日……つまり今日。

朝から駄女神キングボンビーが湧いた。ふあつきん。

まともに対応するのが激しく面倒だったので、簀巻きにしてへファイストスファミアに輸送した。

今日の晩御飯はじゃが丸くん豊饒の女主人スペシャル。

白身魚とジャガイモ、チーズの組み合わせは反則的。

一応早朝に走り込みやシャドーなどの鍛錬は欠かさずに行なっているが、ミアさんの料理が美味しくて、つい食べ過ぎてしまい太りそうなので翌朝から走る距離を増やす事にする。

?月?日

忙しかった。

今日はロキフアミアリアの遠征の打ち上げの予約が入っていたので、仕込みや宴会用の配置に座席を動かしたり、ミアさんの横で簡単な料理を作ったり臨時で配膳役のウェイターとしてホールに出たり、とにかく忙しかった。

エルフの方々以外、何故か露出が多めなのが気になった。

アレが痴女……なのだろうか?

正直あの格好でダンジョン内に入っているとは思えないので、やはり街中では脱いでいるのだと考えると……

うん、この件について考えるのはやめよう。

変態は理解できないからこそ変態なのだ。考えるだけ無駄。

それとウェイターとして働いていた時、ロキファミアに勧誘された。

まあ基本的に神になんて関わりたくもないので断った。

すると何かが気に入らなかったのか、何人かの冒険者に睨まれた。

でもそれが本音なんだから仕方ないと思う。

あ。もしかすると、ロキファミアへの加入を拒否した事ではなく、冒険者の事を意地汚い炭鉱夫と言ったからかも？

実際している事は地下に潜って鉱石魔石を集める事だし、お金さえもらえればなんでもするというのは意地汚いと思うのだけれど、そういう人に限って事実を言われると怒るものだ。

高位冒険者などと言われているが、結局凄いのには神の恩恵による身体能力の強化と言ってしまったことも問題だっただろうか？

あの時は無理矢理お酒を吞まされたのもあって、思考がまとまらなかった。

いや、むしろ思考はまとまっていたが、歯止めが効かなかった。

恩恵のレベルを上げるには偉業が必要だというが、失敗したからと言ってもう2度と上がらないというわけでもない。

ならピンチを演出し、死にかけてたら中断。反省点を考慮して再挑戦……という事を繰り返せば、自然と伸びていくと思う。

ステイタスの値は戦い続けてれば上がるだろうし、時間と労力でどうとでもなる。

知識や技術が要求される生産系はともかく、探索系はそういう養殖が可能なので、尊敬しようがない。

かつてあったアストレアファミリアやガネーシャファミリアのように、市民のためにその力を使うなら別だけれど。

そもそも狡知の神として名高いロキを関わって、どんなトラブルに巻き込まれるかわかったものではない。

神への嫌悪感と酒の酩酊が混ざったような状態で、良くあのまま吐かなかったな。

なんとかキツン裏まで戻ってから盛大に吐いたが。

今日の晩御飯は麦粥とポトフ。

無理矢理吞まされ、激しく嘔吐した僕を見かねたミアさんが、胃に優しい食事を作ってくれた。

ベル・クラネルの日記：3

?月?日

今日も朝の運動から帰り次第、簀巻きにした駄女神をヘファイストスファミアに届ける事から1日が始まった。

今日はシルさんに誘われ、怪物祭というイベントに参加したのだが、シルさんが財布を忘れて全額負担する事になった。

女性とのお出かけなので元々僕が払うつもりだったのだが、財布すら持つてこないというのは流石に無いんじゃないだろうか……?

シルさんと会場内で観戦していた時、ふと気になる人影が見えたので一時退場すると、何故か檻から出ている大きな猿のモンスターに襲われた。

何故か近くに転がっていた武器から大剣と片手剣を手に、大猿を3分クッキングした。

結論。筋が硬すぎてしつかり煮込まなければ食えない。

しかし、魔石を取り外してしまえばモンスターの身体は急速に劣化するので、煮込めない。

せめて魔石は持って帰ろうとポケットに入れ、シルさんが待ち草臥れないうちに会場に戻ろうとしたら、いきなり足元から植物のツタが生えて襲いかかってきた。

大猿よりはやーいが、攻撃は直線的かつ単純。

襲ってくるツタを片っ端から伐採し、最後に花を落として終了。

虹色の魔石という不思議なアイテムを手に入れ、シルさんの元に戻った。

帰る時、ガナーシヤフアミアリアの人に大剣と片手剣の所有者を聞いたが心当たりがないそうなので、おそらく犯人が残っていたのだろう。ありがたくいただく事にした。

この時誰かが話しているのを聞いたのだが、魔法を使うか魔石を持っていると狙われやすかったらしい。

……つまり僕が襲われたのは、大猿の魔石を持っていたから？

おそらく魔石の中身は精神力と同じものなのだろう。

モンスターが魔法を使えないのは、体内の魔石を消費する必要があるから？

もしそうだとすると、魔石を食うという強化種なら魔法を使えるのかもしれない。

肉体の維持にも魔石の中身を消費しているからこそ、魔石を取り除くとモンスターの肉体は朽ちると仮定する。

そうすると魔石を喰らい、魔石が充実して肉体もより強固になったのが強化種。

この仮定が正しければ、魔石の中身を消費して魔法を使えば、それだけモンスターの

肉体が弱くなる。

なら魔法なんて一発の火力に賭けるギャンブルより、より強い肉体で圧倒した方がいい……そういう理屈があるのかもしれない。

多分あのツタから取れた、虹色の魔石は強化種特有の物なのだろう。

……命の色が混ざり混ざって、綺麗な虹色になるとか考えると浪漫があるかもしれない。

今日の晩御飯はこんがり焼けた骨付き肉とパン、コーンスープ。

上手に焼けました！

？月？日

何故かソーマフアミアアの小人族の少女を引き取る事になった。

そう。アレは、先日の買い出しの途中だった。

リユーさんと一緒に食材を買い揃えたので帰ろうとしていたとき、路地裏から僕に目の前に小人族の少女が飛び出してきた。

怪我をしているようだったので、とりあえず簡単な手当てをしようとしたところ、彼女を追ってきた冒険者達に絡まれた……のだが、事情を聞くより先に逃げられてしまった。

そういえば、デメテルファミリアにお世話になつた頃の強盗の中に、彼らも混じつていた気がする。

逃げ出そうとしていた少女を縛り上げ、簡単な手当てを行った。

……毎朝毎朝駄女神を相手しているせいで、人を縄で縛るのが上手くなった。

特に彼女に対してそれ以上のことをする必要もなかったの、開放。

脱兎の如く逃げ出した彼女を追うことはせず、お店に戻つた。

次の休日、犬人の仮装をした少女にサポーターはいかがですか？ と売り込みをかけられた。

サポーターというのは他の冒険者の、補助兼荷物持ちを行う冒険者の事を表すのだとか。

冒険者の落ちこぼれになる仕事と自嘲していたが、とんでもない。

最初はともかく、後々になれば必須になる重要な役職だ。

こんな風に自分を貶すのは、多分扱いが酷かったからなのだろう。

その程度さえ理解できないような冒険者に、大成する未来は確実にないと思われるので、さつさと縁が切れて良かったんじゃないか？

そもそも冒険者に与えられる恩恵は一律であり、そこに優劣は存在しない。

あるのは努力値と生き方によるスキルと魔法、装備と効率くらいだ。

彼女の魔法とスキルは、冒険者としてかなり有用な物だと思う。

シンダー・エラで負傷する前の自分に変身すれば、かなりの継戦能力になるし、縁下力持は単純に重装備が可能だ。

傷を消しながら突っ込んでくる、サポーターもこなせる小さなタンクになれるのでは？ という事を彼女に伝えたところ、泣かれた。

困惑しつともとりあえず、ハンカチを渡して泣き止むのを待った。

しばらくすると泣き止んだ彼女から、装備を買うための資金を集めるためにも一緒に潜ってもらえないかという頼みを受けたが、僕は冒険者じゃないので断らざるを得なかった。

すごく驚かれた。

実は僕は一部の冒険者の中では「屠殺屋ザ・キーパー」と呼ばれているのだとか。

名の由来は、襲ってきた冒険者を屠殺場の職員のように、ただただ正確に解体したところから。

最も重症だった男はレベル1の中では強い方だったので、きつと冒険者なんだろうと思われていたらしい。

……僕って有名人だったんだなあ。

そして今日、彼女は何故か豊饒の女主人で働く事になった。

お目付役は僕。

何を読んでいるのかわからないかもしれないが、僕にも何が起きたのかわからなかった。

超スピードとか催眠術とか、そんなチャチなものでは断じてない。

もつと恐ろしい何かの片鱗を味わう事になった……

今日の晩御飯はハンバーガー。

肉と野菜と炭水化物を一度に摂取できるハンバーガーは、実は健康にいいんじゃないだろうか？

×××××
 ××のベル・クラネル観察日記：1

××月?日

面白い子を見かけたので、今日から観察日記を書く事にした。

彼の名前はベル・クラネル。

今はデメテルファミリアで短期のアルバイトをしている少年だ。

あれは私がいつものように、神の鏡を使って街を見ていた時のことだった……

雑多な魂の群れの中で、純白に輝く魂を見つけた私は、私のファミリアに入れてあげるだけの勇士になるかとも思い、彼にピントを合わせた。

目があった。

まるで私が見ている事に気づいたかのように、彼は振り返ってこちらを見ていた。

びつくりして思わず神の鏡を解除してしまったけれど、その時の特徴だけでオツタルが彼の情報が集めてくれたからそれは別に良いの。

明日も彼を観察しようと思う。

?月?日

やっぱりだ！

彼は私が神の鏡で見るたび、必ずこちらに気づいていた！

私のファミリアでも、これに気付くのはそうそういない。

やはり彼を勇士として、私のファミリアに入れるわ。

オツタルからの報告によれば、彼は新しい就職先を探しているらしい。

そのままこのファミリアに勧誘させようと思ったのだけれど、オツタルからストップがかかった。

どうやら彼は冒険者になる気がないと公言していて、就職先が見つからないのは冒険者にさせようとする誰かの動きのせいの可能性が高いのだとか。

今、冒険者になる気がないにしても、彼が変なところに就職するのは好ましくないの
で、ミアに何かあれば受け入れてあげるようお願いしておいた。

?月?日

彼が冒険者に襲われた。

いや、襲撃され続けていた。

話は聞いていたけど、神の鏡で観察していたのは毎日ごく短い時間だったので、現場を見たのは初めてだった。

まさかあんな市民を人質にとつて脅すような冒険者がいるだなんて……

とりあえず撃退された犯人および協力者、そのファミリアの主神には罰を与えるように指示。

私のお気に入りに手を出しただけでなく、冒険者全体の名声を汚すような行動をした責任、きつちりととつてもらわないとね……

それはそうと、まさか彼があそこまで強いだなんて。

あれなら少しくらい、試練を与えても大丈夫そうだわ。

?月?日

オツタルから驚くような報告を受けた。

彼を襲つて反撃を受けた彼、後遺症でマトモに冒険者活動を続けられないらしい。

回復薬で傷は完治したはずなのにも関わらず、全力で動くと全身に軋むような激痛が走るのだとか。

デイアンケヒトの診察によると、破壊された骨のカケラが健康な肉体の節々、特に関節部に集中して撒き散らされており、もはやエリクサーでも回復し得ない……とのこと。

何それ怖い。え? あの子、こうなる事をわかつてやったの?

確かに命に別状はない程度だけれど、冒険者としては死んだも同然じゃない。

あんな行動を普段からしているとすれば、恨みも買っているはず。

……力を誇示していざり散らしていた屑から、その力の一切を奪ったらどうなるか。

まあ、結果は書くまでもないわね。

それが原因で彼には、ザ・キーパー“屠殺屋”という二つ名が与えられた。

あの子になら、もうすこし可愛い名前でも良いと思うのだけれど……

それとミアから、あの子が今度面接に来るといふ連絡を受けた。

……上手いこと勧誘できないかしら？

?月?日

ミア、グツジョブよ。

?月?日

あの子は冒険者を炭鉱夫の一種だと思っていたらしい。

……あれ? ダンジョンに潜って魔石とドロップアイテムを集めて、その量と質で収

入を得るといふ辺り、特に変わりない?

ま、まあ、ただの炭鉱夫と違い、冒険や出会い、ジャイアントキリングのようなドラ

マもあるもの。

ただ鉱石を掘るだけの炭鉱夫とは違うんです。

それと、今年の怪物祭のとき、彼にちよつとした試練を与えることにした。八つ当たりじゃないわよ？ 元々考えていて、ちょうど良かっただけ。

その日に彼が休暇を取れるように、スケジュールの調整をしておきましょう。

それはそうと、今日もあの駄女神が来ていた。

今日は来店から23秒で簧巻きにされていた。

彼はだんだんとタイムを縮めている。

?月?日

今日は待ちに待った怪物祭!

彼にモンスター共を嚇しかけ、私はそれを観戦しようとしていた!

日頃から武器を携帯できる冒険者ならともかく、一応市民の彼のために、いくつかの武器を近くに置いておくように指示を出したり、色々と手間暇をかけて準備したわ!

そして最後に魅了したモンスターに指示を出し、急いで観戦する場所に移動し、神の鏡を使ったの。

何故か植物のモンスター……オツタルも見たことがないそうなのでおそらく新種

……と彼が戦っていた。

恥も外聞もなく、思わず「ふあ!？」なんて女神らしくもない声を上げてしまったのも仕方ないと思うわ。

それでも、彼はやっぱり凄かった。

大小二振りの剣を的確に操り、まるで料理をするかのように、元々決められていた手順に沿うかのように植物のモンスターを駆除した。

しかし、あのモンスターはなんだっただのだろうか？

私でも虹色の魔石という物を見たことも聞いたこともない。

出来れば間近で見たいけれど、それより先にあのモンスターについて調べなきゃね。

ヘステイアは19秒で簧巻きにされた。

20秒をきった！と無邪気に喜ぶ彼はとても可愛らしかった。

ベル・クラネルの日記：4

?月?日

朝の運動にリリルカさんがついてくるようになった。

非力な筈の小人族が拾った大剣を小枝のように振り回している姿を見ると、恩恵の強
化率は凄いと思った。

人のふり見て我がふり直せというが、冒険者に対する自分の考えが少し甘かったかも
しれない。

ちよつと乱雑に扱ってしまったので、今度椿さんにメンテナンスの方法を習いに行こ
う。

お願いしに行くんだし、何か手土産を持つてくべきだよね？

女性用の化粧品や置物、流行りのお菓子とかより、実用的な物……なんだろう？
鍛冶場で使う物は論外として、彼女が使いそうなの……そうだ！

コレは僕よりシルさんやリユーさんの方が詳しいと思うので、今度お店を教えてもら
おう。

それはそうと今日、何故かロキファミリアの人が訪ねてきた。

この間僕を睨んでいたうちの一人……名前は知らない女性が急に尋ねてきて、いきなり「その人間、ついて来なさい」とだけ言って何処かに行ってしまった。

なんだったんでしょね？ とシルさんと話していると、怒り心頭になった女性が戻ってきた。

何故ついてこないのか！ と怒鳴っていたが、彼女は不審者について行ってはいけな
いという、一般常識を学ぶ機会がなかったのだろうか？

そもそも用件も何も言わず、人間が彼女の命令に従うと思って……ああ、そういう
エルフは、基本的に多種族を見下してるんだっけ？ 手や肩に触れられたくらいでガチ
ギレする程度に。

同じエルフのリューさんが優しいから忘れていた。

……彼女達を拘束した状態で、目の前で住処の森を焼き払えば、少しはその高慢さが
治るかな？

伝説のクロツゾの魔剣と同等の物を量産できれば、不可能じゃないと思う。

結局、彼女は名乗ることすらなく帰っていった。

何をしたかったんだろう？

今日の晩御飯は唐揚げと白米。

いきなり全員分の唐揚げに、レモンを絞ろうとしたアーニヤさんは絶対に許さない。

絞る前にシルさんに止められていなければ、戦争遊戯も辞さない所存であった。

?月?日

今日はヘフアイストスファミリアに駄女神を届けに行つたとき、椿さんと出会つた。そういえばアポも取らずに教わりに行くのも失礼だと思い、今度武器の手入れの方法を教えてほしいと頼んでおいた。

彼女は快く受諾したが、条件を出された。

条件は使つた武器を見せることと振るつた相手の情報を教えること、その時ファミリアの後輩も1人参加させること。

彼女が紹介する人なら信用できるかな? と思い、その条件で合意。

とりあえず今達成できる条件ということで、大猿と植物のモンスターについて話した。

大猿のモンスターはシルバーバックというらしい。

植物のモンスターは現状、判断できないとのこと。

強化種の魔石は虹色なのかと聞いてみたけど、知らないそうだ。

というのも、強化種は元のモンスターの域を大きく超え、魔石を破壊してでも仕留めるといふのが当たり前。むしろ最優先で魔石を破壊するらしい。

なので虹色の魔石が植物のモンスター固有なのか、強化種の特徴なのかはわからなかった。

昨日いきなりロキファミリアの人が現れたことも相談しようかとも思ったけど、流石に頼み事を重ねるのは厚かましいかなと思っただのでやめた。

それにロキファミリアは彼女の顧客でもあるので、下手な事を言っただけで営業妨害する気もなかった。

それと帰り道、不壊属性付きの大型打撃武器の値札を見てきた。

高すぎて今の僕やリルカさんでは、借金ローンしてでも手が届かないということがわかった。

今日の晩御飯はサザエの壺焼きとハマグリの酒蒸し。

オラリオの側にある港町のメ……メラミ？ から、定期的に新鮮な魚介類が仕入れられるそうで。

そこに一軒家を買って置いて、老後を過ごすのも悪くないかもしれない。

美味しいは正義。

？月？日

まーたロキファミリアがやってきた。

今回はアイズ・ヴァレンシユタインって人だった。

用件は怪物祭のとき、僕が戦っていたのを見ていて、どこかの神の眷属なのではないか？ という疑いがかかっているから、確認のためにきてきてほしい……とのこと。

彼女は名前と所属、用件を伝えてきたので、ミアさんに事情を報告。

開店までに帰ってくれば良いと外出の許可がおりたので、ついていくことにした。

リルカさんが護衛として自分も！ と言っていたが、彼女はお留守番。

彼女は面白い出しの荷物持ちとして最強……縁下力持つて凄い。

今思えば、彼女についてきて貰えば良かったと思う。

アイズ・ヴァレンシユタインのいうがままに剣を二振りとも持って、ほいほいついていった先はロキファミアリアの本拠地。

幾何学的に狂ったデザインの大きい建物だった。

案内されてついたのは中庭。

そして何故か、こちらに向けて武器を構えていた冒険者の群れ。

……コレはつまり、そういう認識で良いんですね？

その問いに頷いた彼女の首を真っ先に取りろうとしたが、レイピアで防がれてしまった。

彼女の細い腕でもピクリとも動かせないあたり、恩恵というのはやはり絶大な力を持

ち主に与えるようだ。

彼女に更に攻撃を加えるより先に、こちらに武器を向けていた冒険者達が斬りかかってきたので、乱戦状態になった。

そんな状態では大型の武器は使いづらいので放棄、襲いかかってくる冒険者達から武器を奪いながら戦った。

1番効果的だったのは、冒険者の切り落とされた腕であった。

恩恵は切り離されると無効になるのか、直ぐに壊れてしまったけれど。

いやー、ダンジョン内で痛みとか精神耐性は高いと思ってたけど、実際は驚くほど豆腐メンタルだった。

流石に致命傷は回避したけど、結構ぼろぼろだ。

気づけば襲ってくる相手は全員倒れ臥しており、アイズ・ヴァレンシュタインは居なくなっていた。

まあ敵ではあるが、死なれると面倒くさいので、死なない程度に治療して帰った。

といつても、止血くらいしかしてないけど。

帰り道、怪我をしていたところを見たミアハファミアのナーザという方に、ポーションを売ってもらった。

彼女の腕は義手なのだが、神が手がけた貴重品らしい。

正直言つて解体して観察させて欲しいと思つたが、それはないなと思ひ直し、よく観察させてもらえないかと交渉した。

今度彼女のお店に行き、商品を買えば許可を出すとのこと。

椿さんとの用事が終わり次第、行こうと思う。

今日の晩ご飯はガーリックステーキ。

怪我は肉食えば治るといふミアさんの発言通り、今ではしっかりと治っている。

ポーションは基本、最低限しか使わない物だと思ひます。

ベル・クラネルの日記：5

?月?日

今日は椿さんに武器の手入れを教わってきた。

手土産に選んだのは極東の簪。

椿さんは長い髪を、サラシで縛っていた。

なので簡単そうな手順で、髪を一箇所に纏められる簪を選んだ。

喜んでくれたので、悪くない選択だったと思う。

それと先日のロキファミアリアとの戦闘……といってもあまり使っていなかった。

ヴァ、ヴァ……ヴァレン某に斬りかかったときくらいかな？

あの一件を話すと、顔を伏せながら嗤い始めた。

ちよつと怖かった。

それと、彼女が連れてきたのはヴェルフ・クロツゾという青年だった。

どうやら魔剣を作る能力があるのだが、それを毛嫌いして作ろうとしないそう。

冗談半分で僕は冒険者ではなく、ただただ研究のために1つ作ってくれないかと頼ん

でみたが、けんもほろろに断られた。

武器は相棒のようなものであり、自分だけ壊れる魔剣は武器じゃない。俺は装備を作るために鍛冶師になったんだから、魔剣は作らないというのが彼の持論。

せつかく能力があるのに使わないなんて、勿体なさすぎる。ただでさえ短い人の一生の中で主神殿を超えたいと望むなら、あるもの全て使うべき。だから作れというのが椿さんの持論。

僕にも説得を手伝って欲しかったみたいだけど、僕の意見はどちらかといえばヴェルフさん寄り。

能力があるなら、意思関係なくしなければならぬというのは暴論すぎる。

嫌っていることを無理矢理させるより、本人が望むことをさせた方が上達は早いと思う。

その選択権は僕や椿さんではなく、ヴェルフさん本人にしかないものだというのが僕の回答だった。

それに才能で職種を選ぶというのなら、僕はどうの昔に冒険者になっている。

自分で書くのもなんだが、それなりくらいになれるくらいの才能はありと自負している。

けれど僕は冒険者になる気は無いのだから、彼の意思を否定することはできなかつた。

まあ？ 安価で魔剣を作って欲しくはあるけど、それを強要する気はない程度ではあるんだけど。

椿さんは信頼していた腹心の部下に、後ろから刺されたような顔をしていた。

メンテナンスの指導自体はちゃんと教えて貰えた。

必要な道具はお下がりを貰った。

安価で高品質らしいので、無くなったら同じ商品を買うことにしよう。

今日の晩御飯はオムライス。

どうすればこんな風なフワトロ感を出せるのか、不思議でならない。

特別な材料を入れてはいなかったなので、腕前なんだろうな。

？月？日

苦節14年、ついに魔法の謎の一端を解き明かした！

魔石の中身⇨精神力ならば、魔石の使用前と後を比較し、その前後で消えた何かを抽出出来れば良い。

水に浸けてみたり、炙ってみたり、実験用のネズミに食べさせてみたり……色々試してきたが、遂に抽出方法を確立できた。

凄い勢いで振り回すのだ。

試験管に溶液を用いて溶かした魔石を入れて蓋をし、紐でくくつてなるべく早く振り回すことで、不純物が下に沈殿していく。

そして残った無色無臭の液体が、精神力を抽出した物体になる。

名前はそのままだけど、魔液とすることにした。

魔液を固めて魔石灯に入れると激しく稼働したので、間違いないはず。

問題は、抽出するには大きな苦労が伴う上に、少量しか作れないこと。

それでも既存の魔石よりも高濃度な燃料であり、瞬間最大出力が大きく違う。

……魔石を内蔵したオモチャから、対象物を回転させるようなパーツを抜き取り、この魔液で動かせば良いんじゃないか？

魔石灯での使用結果を見る限り、通常よりも過剰な挙動をするというのは予想でき
る。

今後の実験が楽しみだ。

今日の晩御飯はパン。

実験成功で感激のあまり奇声をあげてしまい、晩御飯抜きになってしまったのだが、リユースさんが自分の分のパンをこっそり分けてくれた。

美味しかったです。今度何か奢らせていただきます。

?月?日

梃子の原理という現象がある。

棒を使って力を入れるとき、端に力を加えた方が簡単に動くつていうものなんだけど、その機能を応用する事で簡略化を計ってみた。

具体的には、滑車と紐を組み合わせる事で、手元の大きい滑車を1周する間に、試験管を括り付けた小さな滑車が20周くらいするような装置を作った。

1週間分の給料が丸々消えた。

しかし……しかし！ コレは必要経費なのだ……！

魔石製品の解析も少しずつだけ進んではいるし、ポーシヨンの実験はナーアザさんという協力者が出来てから飛躍的に進んだ。

研究の一環で最近、こつそりダンジョンに潜っているのも研究の進みに関係があるかもしれない。

といつても、休日に暇なら行く程度なので儲けはほとんどないんだけど。

ちよーつとパープル・モスの鱗粉を採取したり？

ちよーつとゴブリんに魔石を食わせて強化種を作ってみたり？

ちよーつとミノタウルスに殺されかけたくらいだ。

いやー、大剣じゃないとまともに刃が通らなかつた。

びつくりした隙にマトモに一発食らっただけで、腕がバキバキになるとは思わなかった。

それと、魔液はモンスターにとってはポーションのような効果を発揮することがわかった。

何度か動物実験をした結果、おそらく人体にも無害だと思われる。

この後、少し服用するつもりだ。

今日の夜食はメット。

豚の挽肉に塩胡椒を練りこんだお手軽な料理だ。

添え物の玉ねぎと合わせてパンに乗せると、とても美味しい。

?月?日

世界が物理的に輝いて見える。

え、何これ?

ベル・クラネルの日記：6

?月?日

世界が物理的に輝いて見えた昨日。

どうやら僕の目は一時的に、精神力を視認できるようになっていたらしい。

今日起きた時には、すでに普通の視界に戻っていた。

連続して服用した場合、どんな副作用が出るかわからないので、今日は飲まないことにした。

今回の事で恩恵を受けていない市民にも、ある程度以上の精神力は宿っていることが判明した。

しかし死にかけている人や病気の人、飢えた子供のような弱った人間には少ししかなく、少しずつ失われているように見えた。

多分、生命力のような物と連動しているのだと思う。

だから精神力のみを使いすぎた場合でも、肉体に影響を及ぼす。

しかし身体と直接連動しているわけではないので、いきなり倒れる……と。

昨日は色々な人を見た。

リリルカさんは何かに怯えるような、不安を感じさせる半透明な黒。リユーさんは吹き抜ける風のような、清涼感のある翡翠色。

駄女神とシルさん、ヘファイストスさんは見えなかった。

神は大きすぎて見えないのかな？

シルさんは恩恵とは別の、神の力のような何かに守られている感じ。

ミアさんは大樹のような重厚感のある焦茶色。

あ！ 特徴的な色といえば、ヴェルフさんは2色の赤が混じっているような感じだった。

他の人が単色というわけではないんだけど、なにかと同時に見ているような感じ。

おそらくあれが、クロツゾの魔剣の元となった精霊の力なのだろう。

僕自身の色は透明な白だった。

シンダー・エラを使うリリルカを見ながら、精神力をどうにか動かせないかと色々試していたところ、あっさり動いた。

といっても自由自在と言うほどではなく、かなり大雑把。

精神力を動かす感覚は覚えたので、正確に細かく使えるように慣らしていこうと思う。

今日の晩御飯は回鍋肉と漬物。

ご飯が進みすぎる。

?月?日

ただちに害はなさそうなので、魔液を服用してダンジョンに潜った。

人間は精神力が全身に纏うように存在しているのだが、モンスターは魔石の部分に精神力が集中していた。

ほぼ全てのモンスターは同色であり、光すら戻ってこれなさそうな、深淵のような漆黒。

それとダンジョンで、不思議な人? とモンスター? を見た。

人? は人間のような見た目なのに、モンスターのように体の一箇所に精神力が集中していた。

あの女性はシンプルに強いと感じた。

ヴァレン某と同等……いや、それ以上?

モンスター? はモンスターなのに、人間のようなカラフルな精神力の色をしていた。

モンスターだと思って直ぐに襲いかかろうとしていたりリルカさんを止めると、こちらに気づいて逃げ出してしまった。

まるで怯える人間の子供の様に。

モンスターののような人間と人間のようなモンスター。

調べてみる価値はあるはずだ。

今日の晩御飯は大鰯の煮付け。

こんな大きな魚がいるなんて思わなかった。

海は広く、大きい。

?月?日

僕の熱意に感服したのか、ついにヴェルフが魔剣を作ってプレゼントしてくれた!

ああ、呼び捨てで良いと言ってくれたので、今日からヴェルフと書く。

初めて手にした魔剣はガラスのような質感の鉱石で出来ていて、確かにまともな武器としては使えそうになかった。

それと製造過程も見せて貰えたのだが、やはり2種類の精神力が合わさるように練り込まれていた。

精霊の精神力? が混じることにより、魔剣として強力になるのだと思われる。

とりあえず使用前のデータや形をとり、使用后と比較する予定だ。

込められている精神力から見て、3回使えば壊れるような感じなので、気をつけて使

いたい。

……デザインで発動する魔法は決まるのかな？

そういえばクロツゾの魔剣といえば、炎の印象が強い。

これも炎の魔剣だというし、精霊の精神力に引っ張られるのかもしれない。

今日の晩御飯はカレー。

手掴みで食べる食事があるとは、世界は広いなー。

?月?日

研究資料を入れた箱の罫が起動して資料が全て焼失したので、資料の作り直しと罫のアップデート作業で休暇が潰れた。

ミアさん達は誰も入ってないと言っていたので、おそらく姿が見えない視線の何者か
が原因だと思われる。

魔石製品を転用した魔法的な鍵を開けた事で油断し、物理罫に気づかなかつたのだら
う。

開けようとした相手に自作の遅効性の毒霧を吹きかけ、中身を燃やし尽くす仕組みに
なっており、市販の解毒薬では病状は進行するように調査してある。

というより一応分類は薬なので、解毒薬や回復魔法の対象外だと思われる。

もちろん専用の特効薬を渡すつもりはないし、準備もしていない。恨むなら、馬鹿な行いをした自分を恨むんだね。

それと、精神力の操作は詠唱を行う事で、より正確にコントロール出来ることが判明した。

試しにきちんとイメージを固めて、シンダー・エラの詠唱を真似てみた。

不完全ではあったが、出来た。

ちなみにイメージしたのはアーニヤさんやクロエさんのような猫人になった自分。尻尾が生えないという失敗はあったものの、耳は猫耳になった。

リルルカさんとクロエさんに見せてみると、襲われかけた。

リユーさんが止め、シルさんがミアさんと呼んでくれなければ、大変なことになっていた気がする。

今日の晩御飯は焼き魚。

猫人だからか、異様に味噌汁とご飯を混ぜたくなった。

し、静まれ……僕の右腕……！

そんな食べ方をしたら、ミアさんに怒られる……！

ベル・クラネルの日記：7

?月?日

ギリシヤ神話の腐れ外道、マツチポンプの神ヘルメスが訪ねてきた。

控えめに言つて死ねば良いのに。

僕の部屋に勝手に入った事や箱を開けようとした事を謝罪しつつも、その目的と方法は頑なに話さないどころか、僕の罪悪感を煽るように話しながら中身を探ろうとする屑と、その関係者のために渡すものなど一切ない。

僕の部屋に侵入者なんていなかったし、誰も見ていないから、いきなり病氣や毒の話もされても困ると突っぱねた。

あの薬はポーシオン製作の一環で出来た薬で、生物の免疫を強くする一種の予防薬だ。

使用时には水で薄めて使うのだが、罨に仕掛けてあつたのは原液。

まあ、免疫過剰反応で飲めず食えず触れず、そんな三重苦の状態になっているのだと思ふ。

見せしめには十分だと思つている。

今回の罫にはまた別の経路で効果を出す薬品を使用してあるので、対策が取られる可能性も低い。

今日の晩御飯はじゃがバターとサイコロステーキ。

腐れ神の不幸で、今日もメシが美味い！

それとは関係なく、ミアさんの腕前が凄いからなんだけどね！

?月?日

色々あって、ミアハファミアがイシユタルファミアにいくつかの薬を定期的に売る契約の橋渡し役になった。

イシユタルも相当自分勝手に神らしい神なのだが……ギリシャ神話の悪辣さと比べる……ね?

ミアハはアレだ。キングボンビーを超えたキングボンビー。

カイザーボンビーとでも呼ぼう。

今回の件の始まりは、街中でヘルメスファミアに絡まれた事から始まった。

いきなり難癖をつけられて追いかけてまわされた僕は、気づけばイシユタルファミアの歓楽街近辺に隠れていた。

この時匿ってくれたのが狐人の春姫さんと、アマゾネスのアイシャさん。

ホツと一息をついたときに襲いかかってきたのが、アイシャさんと同じアマゾネスとは思えない、フリユネという戦闘娼婦だった。

どうやら僕のが気に入ったと言いなながら手を伸ばしてきたのだが、本能的な危険を感じて拒否しながら回避。

そしたら逆上して襲いかかってきたので……冒険者って逆上する人多いな、牛乳飲んでる？ ……戦闘が始まってしまった。

といつても、実際は逃亡だったのだが。

武器もなしでレベル5とか相手してられるか！ 僕は逃げたぞ！

家屋や壁を破壊しながら追ってくる、モンスターのような奴から逃げ続けた。

幸運にもその前日僕は魔液を服用していたので、相手の動きを予測して何とか逃げきった。

最後は一瞬視界から外れた際にシンダー・エラを発動、服ごと他人に化けてやり過ぎた。

這々の体で、何とか2人の元に戻り、生存報告。

このままでは普段の生活も木っ端微塵にされそうなので、武器と薬物、魔剣まで携えた全力の戦闘態勢を整え、広場で待ち構えた。

そこから先は最早薄ぼんやりとしか覚えていない。

無事なのは片腕と片脚だけで、何とか剣を支えに立っていると聞いた有様だったが、何とか勝った。

命の危機を感じた戦いは久しぶりだったが、おかげで精神力を一部分に集めることにより、単純な強化と自己治療力強化が行える事や、精神力の滑らかな操作、無詠唱魔法の可能性などなど、様々な発見が得られた。

その場で倒れそうになった僕はアイシャさんに抱えられ、お抱えの薬師の元に運ばれたらしい。

ポーシヨンによる治療を受け、1時間くらいで目覚めた僕は謝罪のためという事でイシユタルに会うことになった。

そのとき勧誘されたが、冒険者にも男娼にもなる気は無いのでと拒否。

何故かびつくりしたような顔をしていたけど……

その後僕が使っていた戦闘中に使った薬品について聞かれた。

感覚鋭敏化薬から幻惑香、発火液などを使ったのを見ていたそう。

別に隠すような物はないので、自作の薬であり、神の恩恵のアビリティである調査や神秘という補正を必要としない、化学に基づいた作品と説明。

すると売って欲しいと頼まれたのだが、共同開発者のナーザさんに許可なく商売はできないので後日……と言った30分後、ナーザさんが連れてこられた。

商売人として全力を振り絞ったナアーザさんにより、継続して購入することと研究費用を負担すること、カイザーボンビーに手を出さないことなど……いくつかの条件のもと取引が成立した。

研究費用は僕8ナアーザさん2だが、販売額は僕2ナアーザさん8で概ね纏まった。

もしかして今日起きたこの騒動で勝ったのは、借金返済のアテもでき、今後の安定した収入も確定したナアーザさんなのでは……？

つまり僕は敗北者だった……!?

それと春姫さんのレベルアップ魔法を殺生石という石に入れ、誰でも使えるようにするという計画があつたらしいのだが、フリユネとの戦闘で殺生石が粉碎。

そして恩恵を受けていない僕がレベル5のフリユネを倒してしまったことにより、レベルアップしても勝てないのでは……という不安を抱えたことにより、何故かその責任を僕が負うことになった。

具体的には眷属に指導しろとのこと。

ナアーザさんが、リリルカさんという僕の指導を受けた冒険者が急に強くなった。なんて話をするから……!

とりあえず、指導対象全員分のデータを見てから決めること、成長しなくても文句は言わないこと、ちよつとトラブルに巻き込まれているので、その時は味方してもらうこ

とを条件に受けることにした。

被験体が増えれば、研究も進むと思うことにする。

今日の晩御飯は肉と牛乳。

肉は傷ついた肉体を修復し、牛乳は骨をより強靱にするのだ。

ベル・クラネルの日記：8

?月?日

ギルドから出頭命令が来たので、手紙だけ渡して無視した。

手紙には以前、同じように言ったロキファミリアについていったとき、武器を向けられたので行く気は無い。とだけ書いてある。

それに犯罪を犯したわけでもないし、特に出頭しなければならぬ理由がない。

しかし、僕の個人的な事情でこれ以上お店に迷惑をかけるわけにはいかないので、豊饒の女主人を辞職することにした。

ミアさんに辞職届けを提出し、他の人にも今までの感謝を伝えてから、必要最低限の荷物を持って出ていった。

短い付き合いだったが、イシユタルファミリアにも行った。

しばらくの間は自然豊かな18階層から24階層で生活しようと思う。

真つ当な生活が送れなくなった腹いせに、なぜウラヌスのみがダンジョンを抑え込めるのかの推測とギルドと闇派閥が協力してアストレアファミリアを潰した可能性とその理由の解説、ロキファミリアは市民を呼び出してリンチしようとしている事実を簡単

にまとめて、町中にばらまいてきた。

何故オラリオにハデスやエレキシユガルのような冥府の神とガイアやティアマトのような地母神がいないのか。

ギルドという組織にとつて、武力を持った自警団という存在がどれだけ邪魔になり得るか。

そんな事実を元に書いたので、信憑性はあると思う。

今日の晩御飯はリユーさんがくれたお弁当。

死ぬかと思った。

?月?日

シンダー・エラはとても便利。

ロキファミアリアを見つけた時はヒヤツとしたが、髪の色と顔つきを少し変えれば全くバレない。

ヴァレン某だけは野生の勘か、時々僕の方をチラリと見ている時があつてドキツとしたが、大丈夫。

18階層の一面に作った簡単な新居に入れたい家具をリヴェラの町に買いに行ったのだが、普通に買えた。

魔石で物が買えるというのは、楽で良い。

透明人間みたいな視線は消えたのだが、最近視線が増えた。

視線の主は18階層に時々現れるリザードマン。

精神力を見る限り、人間みたいなモンスターで同一個体だ。

チラチラとこつちを見ておきながら、僕がそつちを向くと直ぐに逃げ出す。

しばらくすると戻って来てまたチラチラと……

いい加減鬱陶しいので、明日捕獲する。

今日の晩御飯は18〜24階層で採れた木の実。

そろそろ肉も食べたい。

?月?日

捕獲したりザードマンはなんと共通語を話し、リドと名乗った。

見たことのない空に憧れるモンスター……ね。

僕の事を絶対に誰にも話さない事を条件に解放。

異端児とモンスターの関係、ダンジョンで生まれたはずなのに知っている外の景

色、そして彼らを保護しようとするフェルズという存在とガネーシャファミアリアの関連性。

とりあえず魔液を飲ませてみた。

深層の魔石よりも濃厚で、病み付きになりそうな芳醇な味と香り……とのこと。

僕からすれば無味無臭なんだけど、モンスターにとっては違うようだ。

蓋を開けておけば、モンスター寄せになるかもしれない。

今日の晩御飯はリヴェラの街で肉まんを食べた。

物価こわれてる。

?月?日

魔液の蓋を開けたまま探索していると、モンスターみたいな人間にまた出会った……
といっても、僕が一方的に見たことがあるだけなんだけど。

彼女はどうかやら、魔液の匂いを感じできるらしい。

紆余曲折の末、彼女はレヴィスと名乗った。

レヴィスさんは魔液に興味を示していたので、一本無料でプレゼントした。

原料が魔石と聞いて噴き出してたけど。

モンスターっぽい人間という第一印象を伝えてみると、普通に怪^{クワイチャー}人という人間とモ
ンスターの混合種だと教えてくれた。

あれ? もしかして、口封じされる? と思つたが、言いふらしたりしなければ別に

良いとか。

馬鹿が情報をばら撒いたせいで、すでに知っている冒険者も多いのだと。

異端児との関係性を聞いてみたが、知らなかったみたいで、結構驚いていた。

今度リドが訪ねてくるとき、紹介しようかなーなんて思っていると、冒険者が騒ぐ声が聞こえた。

どうやらヴィーヴィルを探しているらしい……と思った時には、僕たちの前にある角からヴィーヴィルが飛び出してきた。

しかも丁度話していた異端児のヴィーヴィルだった。

とりあえず彼女はレヴィスさんに預け、こちらに来た冒険者に違う道を教えてどっかにやり、自己紹介。

彼女はウイーネと名乗った。

怪人であるレヴィスさんから見ても奇妙な生き物のようで、物珍しげに見ていた。

僕はとりあえず魔液をプレゼントした。

やっぱり美味しいらしい。

それと同時に、明らかに強くなった気がした。

レヴィスさん曰く、モンスターにとつてのレベルアップに近い現象なのだとか。

とりあえず行く場所がないらしいので、僕の家に来て帰ることにした……何故かレ

ヴィスさんも一緒に。

今日の晩御飯は魔液を混入させた炒飯。

普段より、味が濃い気がした。

?月?日

詠唱による精神力の操作の実験を繰り返した結果、物体をどこかに出し入れ出来る魔法の開発に成功した!

僕を探していたのかこの階層にしばらく留まっていたロキファミリアも昨日帰ったし、研究資料や設備を置いたこの家ごと格納して久しぶりに地上に出ることにした。

ちなみにウィーネも一緒に格納している……そこら辺のゴブリンを格納して試した結果、害はないことを確認してある。

レヴィスさんは朝起きたら、すでに何処かに行っていた。

久しぶりの太陽!

豊饒の女主人まで行き、シンダー・エラを解除。

素顔で人前にも随分久しぶりで、なぜかちよつとした爽快感がある。

今日の晩御飯は豊饒の女主人でミアさんのおすすめ定食。

美味しいという感想以外が浮かばないくらい美味しい。

?月?日

思った通りギルドとロキファミア、ヘルメスファミア、デュオニユソスファミアが僕の身柄を抑えようと、町中ダンジョン中を探し回っていたそうだ。

手配書まで配られているのだからか。

関わりないはずのデュオニユソスは確か、神になるため人間のまま大虐殺を繰り返した、ギリシャ神話のたいりよう殺人鬼じゃないか。

関わりたくないにもほどがある。

なので、オラリオから1度離れることにする。

1ヶ月もすればほとぼりも冷めてると思うので、とりあえず港町のメレンに向かう事にした。

新鮮な海産物を食べてみたい。

そのことを伝えると、何故かアイシャさんがついてくることになった。

イシユタルは逃げないようにするためのお目付役と言った。

リリルカさんは「ちよつとファミリアの問題を片付けてきます……物理的に」と言い残して、一昨日から1週間の休暇を取って不在だったので、会えなかった。

今日の晩御飯はミアさん特製のお弁当。

冷めても美味しいという、料理人の心遣いが垣間見れる素晴らしい一品でした。

戦闘娼婦のレポート

あれはいつものように、店先で開店準備をしていた時のことだった。

誰かに追いかけていたあの少年が、見た目的に好みだったのもあって匿うことにした。

追っていたのはヘルメスファミアのこの冒険者で、万能者は居なかったが、それでも恩恵を持たない市民を追いかけるには過剰だと感じたが、適当なことを言っただけでやった。

春姫に対応させていた少年は撒けたことにホツとした感じで、私にお礼を言った。

普段、そんな純粋な感謝を伝えられるようなことがないので少しこっぴどくかしかつたが、礼なら一晩買わないか？ なんて風に誘おうとしていたタイミングで、あの馬鹿がどこから嗅ぎつけたのか現れやがった。

少年はフリユネの誘いを拒否して逃走、まあ当然だよな。

フリユネは当然の権利と言わんばかりに、付近の建物を壊しながら追いかけていった。

……今日の営業は修理で終わりそうだね。なんて思いながらある程度瓦礫を片付け、

イシユタル様は報告に行こうとしていたところ、なんとあの少年が戻ってきた。

どうやら市民がフリユネを撒いたらしい。

若干この辺りから、アマゾネスの本能とか何というか……強い男を捕食するためのセンサーが働き始めていた気がする。

この時初めて、少年がベル・クラネルという名前なんだと知った。

私と春姫も自己紹介を返し、とりあえずあの馬鹿はどうにかしておくからさっさと逃げるように伝えたのだが、少年は逃げないと言い始めた。

どうやら馬鹿はもう一人いたらしいと思いつながら、どこか期待している自分がいた気もする。

結局私の説得は意味を成さず、彼はあの広場でフリユネと戦うことになった。

戦いは常に、彼の手の平の上だった。

レベル差5という、もはや攻撃すら見えないほどの差があるはずのフリユネの棍棒を躲し、躲し続け、かと思えば自傷も辞さないような特攻。

見ている気が気じゃなかった。

彼が使った薬……感覚鋭敏化薬とかいうのの効果で、フリユネの行動はかなり制限されていたとはいえ、それでも、腐ってもレベル5。

両足を凍らされ、全身を炎に舐められながらも放った一撃は、彼を人形のように弾き

飛ばした。

投げ捨てられたオモチャの人形のように壁に叩きつけられた彼は、見てわかるほどに致命傷だった。

しかし彼が何かを唱えると、その傷は部分的にはあるが治り始めていた。

魔法やスキル？ 冒険者でもないのに？

そんなことを考えている間に、彼は両手に剣を構えて特攻していった。

その姿は無辜の人々を傷つける醜悪な怪物に立ち向かう、物語の主人公のようにも見ええた。

最初は剣を叩きつけた跡しか残らなかつたのだが、刻一刻と切り傷を増やしていき……最終的にはフリユネの持つ棍棒ごと叩き斬った。

血を流しすぎたのか、何かの薬の効果か……ついにフリユネは倒れ伏し、起き上がらなくなった。

それを彼は、なんで立ててるのかわからない身体を剣で何とか支えながら近づいていき、フリユネに何かの薬を振りかけた。

この時何の薬かはわからなかつたが、後で感覚鋭敏化薬の解除薬だと聞いた。

そして彼も倒れそうになったので、思わず咄嗟に彼を支えていた。

とりあえずさっさとエリクサーでも何でも使って治療しないと！

私はそう考えて行動していた。

フリユネ？ 虫並みの生命力だから死にやしないよ。

レベル4の私が出せる全速力で彼をお抱えの薬師の元へ運び、自腹を切って治療させた。

この時にはアマゾネスの本能センサーが全力で働き、寝てる間にちよーつと子種でも頂いておこうかと思っただけ、ドクターストップがかかってしまったので泣く泣く断念。

仕方ないので、目が醒めるまでの間に今回の騒動をイシユタル様に報告していた。

彼を魅了して眷属にしようとするイシユタル様に、少しモヤつとした物を感じながら、でも同じ眷属になるならいつかと思っていた。

彼は1時間ほどで目覚めた。

事情を説明し、イシユタル様の元に案内した。

一応あの馬鹿について謝罪するというのも嘘じやないし。

そしてイシユタル様が魅了を使いながら眷属に誘ったのだが……まさかの拒否。

魅了が完全に効いていないというわけでもなかったみたいだけれど、まさか拒否されるとは思っていなかったのか、間抜けなアホ面を晒すイシユタル様は笑えた。

美の女神としての矜持かすぐに気を取り直し、あの時使っていた薬を買う方に話をシ

フトした。

するとナアーザとかいう女の許可が必要とのこと。

とりあえず連行してきた。

その結果、定期的仕入れる事などを条件に概ね合意。

このときイシユタル様が殺生石なんてもんを仕入れていた事を知ったが、もはや無意味と断じていたので特にいうことはない。

もしも彼が来ていなければ春姫は……いや、よそう。

結果的に大丈夫だったんだから、気にしない方向で。

それよりも、彼が私らの指導を行うという事の方が大切だ。

彼の指導を受ける事で市民でも冒険者に勝てる可能性が生まれるなら、冒険者なら1つ2つくらい上のレベルでも勝てる可能性が生まれるはず。

それなら春姫も死なないで済むし……うん、それが良い。

そういうえさつき通達があつただけで、彼を相手にできればボーナスが出るんだとさ。

まあヤレるならヤルよね……アマゾネス的に考えて。

それはそうと、彼が帰つた後に目覚めたフリユネがいきなりダイエツトするとか言い始めた。

私も思わず2度見ならぬ2度聞きした。

え？ あの美的センスが狂ってるとしか思えないアイツが!?

ベル・クラネルの日記：⑨

?月?日

3Kほど歩き、港町メレンについた。

家は持っているのですが、場所を借りるために町の偉い人に会いにいった。

追い返された。

どうやら街長さんはギルドとちよつとした敵対関係にあるらしく、ギルドの手先と話す事はないと言われてしまった。

誤解されるというのは、かくも悲しいことである。

しょうがないので、海岸の物陰で1度取り出し、ウィーネを救出。

どうやら内部で時間は止まっていたようで、食事として中に置いていた魔石と魔液は減つておらず、ウィーネから見るとダンジョンから此処に気づけば来ていた感じなのか。

僕自身を入れてしまうと、金庫の鍵を金庫の中で保管するような状態になってしまうのか。

その後ウィーネに簡単な変装……エルフのよく着る感じの服とフード付きのマント、

長い手袋で肌を覆った。

エルフだと思えば、話しかけようとか関わろうとする人が殆どいないので、まずバレンない。

結局その後宿をとった。

まるで人間のように僕らと話し、食事をするウィーネを見て、ほっこりしている人が結構居た。

今日の晩御飯は海鮮カレー。

港町なだけあり、新鮮な魚がたくさん入っていた。

?月?日

今日釣りに出かけたとき、ある着想を得た。

透き通っていて綺麗な眺めの海……下から見るとどうなんだ?

というわけで、これまで解体・研究してきた魔石製品を応用し、着用者の周りに空気
の膜を形成する鎧というものを作ってみた。

名を潜水鎧。

全身を覆うフルプレートメイルなので重いのが難点だが、なかなかの傑作だと思う。

今は全身に効果を及ぼすために全身を覆い尽くすような形になっているが、将来的に

は腕輪のようなアクセサリー一つで効果を發揮するようにしたい。

それと、ウィーネが泳ぐ人達を羨ましがな目で見ていたので、シンダー・エラに近い効果を持つネックレスと腕輪を作った。

最初に登録した容姿にしか変装できず、時間制限もあり、ステイタス的な変化が起きない、ただの偽造のための劣化品だが、ウィーネは喜んでくれた。

ウィーネだけにプレゼントというのも悪い気がするので、アイシャさんにも何かプレゼントを用意する予定だ。

今日の晩御飯は刺身。

今日僕らが釣り上げた魚を、宿の板前さんが捌いてくれた。

生のままの魚というのに気後れしたが、食べるととても美味しかった。

?月?日

この海には、リヴァイアサンの遺骨が埋まっているらしい。

そんな情報を手にした僕は、昨日作った潜水鎧の実験を兼ねて、潜つてみる事にしたのだが、いくつかのトラブルが発生。

先ず、怪物祭の時の植物モンスター襲来。

コレは、潜水鎧の動力である魔液に惹かれたのだと思われる。

次に、ロキファミアリアのアマゾネス姉妹の襲来。

コレに関しては何故かがわからない。

僕がこつちにきているという情報があつたとしても、全身鎧で姿がわからないはずだ。

植物モンスターの横槍により、先にそつちを倒すように動き始めたが、本気でわからない。

さらに重なつた問題は、手負いになつた植物モンスターが何を思ったのか僕を啜えたまま、ちようど入港してきたガレオン船に襲いかかつた事だ。

なんとかガレオン船に大きな被害が及ぶ前に魔石を掴んで引きちぎる事に成功したのだが、そのまま打ち上げられた僕はガレオン船の甲板に叩きつけられた。

もはやトラブルが起きすぎじゃないかと思うが、この時の衝撃で鎧が歪み、外れなくなるというトラブルが発生。

しかも船に乗っていたのは共通語を話せないアマゾネスばかりで、侵入者と勘違いされて大乱闘に発展してしまつた。

流石にこちらに非がある事で相手を殺傷するわけにもいかないのです、リヴァイアサンの遺骨を見聞するために用意していたトンカチと、鞘に納めた護身用のナイフで相対し、数十名を海に放り出した辺りで、明らかに別格の2名が出てきて戦う事に。

どちらも自分自身に作用するような魔法を使っていたのか、攻撃をさばくだけでなんか痛かったし、血を舐めるような変態に関わりたくない。

この潜水鎧、限界まで軽さを追求したせいで耐久性は皆無なので、咄嗟にナイフを投げつけて水中に逃亡した。

出血が酷いし、潜水鎧の壊れた部分から浸水してきて非常に気持ち悪いということもあり、さっさと陸上に上がって壊れた潜水鎧を破棄、まだ機能が生きている兜だけ回収して逃亡した。

今日の晩御飯は海鮮丼。

無邪気に笑うウイーネとの食事以外に癒しのない、まさしく厄日だった。

アイシャさんは用事があるとかで今日はいない。

何してもロクな結果にならない気がするので、さっさと寝る。

ツライ。

?月?日

昨日の晩、アイシャさんはイシュタルファミリアに一時的に帰っていたらしい。

というのも、あのガレオン船に乗っていたアマゾネス……カーリーファミリアをここに呼んだのはイシュタルだったのとか。

なので、カーリーファミリアの出迎え役兼イシユタルの護衛として昨晚はいなかった。

本来は、殺生石を利用して行うはずだった儀式で完成する予定だったアイテムを使い、合同でフレイヤファミリアを奇襲するという計画だったのだが、僕のせいで計画は木っ端微塵。

そして一時的なレベルアップに頼らない、レベル差を覆すような強さを得て真つ向から潰すために鍛え方を僕に教わるという予定だったのだが……

既にカーリーファミリアに密書を渡していたのを思い出し、慌ててミレンに來たのだとか。

そしてうっかり僕のことを包み隠さず話してしまい、カーリーとその眷属に興味を持たれたそうだ……

別の意味で外を歩けなくなった。

おのれイシユタル、今度会った時には「私は駄目な女神です」と書かれた板を持たせて、歓楽街を一周させてやる……!

それとアイシヤさんからの情報なのだが、ロキファミリアは女性メンバーしか來ていないようだ。

部屋にこもろうと思ったが、遊べないと聞いてシヨボンとしたウィーネが見てられな

かったので、シンダー・エラ変装して外に出た。

この間見つけた人気のない海岸で遊んだり、潜水鎧の修理をしたり、アイシャさんへのプレゼントを作っていたりしていたら、何故かアマゾネスに襲撃された。

大半に逃げられたが、何とか捕縛した1人にどうして襲ってきたのか、どうしてこの場所に来たのかなどと聞いたところ、僕を探しており、見つけたのは女の勘、見分けたのも女の勘との事。

対策のしようがないぞ……!?

この子が捕まったことは気づいているだろうから、この子はこの場所に放置して帰った。

何故か宿にもアマゾネスが居た。

アイシャさんにウィーネを預け、一目散に逃げ出した。

今日の晩御飯は抜き。

足音がした。

ここも既に安全じゃないらしい。

どこかに隠れないと……

Nルート

ベル・クラネルの日記：10

?月?日

ウィーネが拐われた。

犯人はカーリーファミア……

アマゾネス供を、なんとか撒いて帰ってきた時に現場に居合わせたのだが、ロキファミアに襲撃されて見失った。

アマゾネスの言葉で何か言い残していったのだが、僕にもアイシャさんにもわからなかったもので、ちょうど襲つてきていたロキファミアのアマゾネスに翻訳させた。

「今夜、あの砂浜に1人で来い」という意味だと聞きだし、用済みになった姉妹を格納した。

帰るのが遅くなりそうだから早めに日記を書いたので、晩御飯は抜き。

?月?日

いやー、今日はとても良い日だ！

実験動物がたくさん手に入ったし、ウィーネも無事。

更に広大な土地と船が手に入った！

気分が良いので、ロキファミアのアマゾネス姉妹は返してあげた。

お土産として、魔液を服用させてあげたくらいには、清々しい気分だ。

切り札の魔法その1は想定通りの効果を発揮したし、切り札その2の試作品の稼働データも得られた。

それと、アイシャさんへのプレゼントも渡した。

火精霊の護布を参考に、装着者に高い耐火性能と精神力を流すことで火の付与魔法を発動できる、火精霊のプレスレットと命名した一品だ。

火精霊の護布は、火精霊が自らの魔力を織り込んで作る。

魔力とは精神力であり、即ち精神力自体を直接操れるならば、改造も難しい事ではない。

今回は火精霊の護布を解き、属性付けした魔液に浸したりして効果の拡張を行い、織り方で付与魔法を付属させた。

氷耐性は消えたが、火という括りにおいて、できない事はあんまりない！

そう言い張れるだけの出来だ。

それと、ウィーネの正体がバレた。

拐われた時、ネックレスが千切れかけていたようだ。

ヴィーヴィルというモンスターを知らない子供達は大丈夫だったのだが、ロキファミアの誰かに見られていたらしい。

変身アイテムの存在がバレ、変身していた姿から宿がバレ、ウィーネを見て人間みたいなモンスターがいることがバレ……

色々考えて相談した結果、オラリオに戻ることにした。

色々トラブル続きで使い続けることになって、そろそろ魔石が尽きそうだったのでちようど良い。

しばらくはイシユタルファミリアが匿ってくれるそうだし、何か手土産を作っている。

今日の晩御飯は舟盛りと蟹……の予定だったのだが、ロキファミアが襲撃してきたので御破算。

この所業、絶対に許さんからな。

食べ物の恨みは、末代まで崇られても仕方ないものだとは知るが良い。

そのためには、神々が管理しているという魂を確認・接触・加工する方法を見つけなければ……

来世、来来世、そのまた来世までも、死因が餓死になるようにしてやる……！

?月?日

久しぶりに椿さんとヴェルフに会いにいった。

抱きつかれた後、バックドロップを叩き込まれた。

死ぬかと思った。

まあそれはそれ。作品を見せてもらった。

初めて此処に来たあの頃と違って、イシユタルファミリアとの取引で金はあるのだ。

そういえばマトモな打撃武器を持っていなかった事に気付いたので戦鎧、手軽な武器も欲しかったのでダガー、そして切り札製作に必要なだと思つた肩まで覆う不壊属性付きの籠手を購入。

改造するつもりという事を伝えたと、その現場に立ち会う事を条件に許可が出た。

なので、工房を借りて戦鎧とダガーを改造した。

籠手? ちょっと素材が足りなかった。

先ず戦鎧は、土属性の属性付けをした魔液に漬けたんだ。

土属性の魔液に漬けたら、重く鈍く頑丈になりやすい傾向がある。

今度、リリルカさんの武器にも同じ処置を施すか、聞いてみることにする。

ダガーは実験動物の1匹が使っていた、毒の付与魔法を付与してみた。

これでこのダガーは切れば切るほど、より深い毒を持つこととなる。

コッチは魔法を発動するための結晶化した固体魔液燃料を入れるためのスペースと、魔法を発動するための印字を刻み込んで完成。

その結果、椿さんから技術指導を頼まれた。

明日も特に予定はないはずなので、魔液を寝る前に服用する事を条件に受けた。

前に装備の整備方法を教わったしね？

もちろん魔液の効力と原料、安全性が証明されたわけではないということも伝えてある。

製法はまだ秘密だ。

そういえば、フリユネさんがなんか面影がないくらい変わっていた。

身長は変わらず、スラツとした美人になっていた。

思わず名前を聞きなおしたくらいは驚いた。

今日の晩御飯は久しぶりのミアさん特製定食。

僕は知らないけど、母親の味っていうのはこういうのかもしれない。

?月?日

本日は椿さんへの指導日。

先ずは魔液の効果が発揮しているか確認。

その後は昨日買っておいた魔石製品を分解して刻まれた紋様の解読、平行して精神力の操作の練習を行った。

コレでは鍛冶師というより、魔道具屋のようだと言われたが、実際そうなのだから仕方ない。

簡単な魔法の詠唱と精神力の動かし方を教えたあたりで今日はおしまい。

それと、夜にダンジョン内に入った時にリルカさんを見かけた。

なにかのストレスを発散するかのようになんたらアレ。

大斧と戦鎚と槍を足して2で割ったような武器を振るいながら、ゴライアスと戦って……蹂躪していた。

確かゴライアスはレベル4くらいのモンスターだったはずなので、リルカさんはレベル4以上の強さになっているらしい。

昔は卑屈で内気だったリルカさんが、あそこまでアグレッシブになるだなんて……

今日の晩御飯は。パエリア。

同じ海鮮系の料理でも、刺身や海鮮丼とは別方向で美味しい。